

## こどもの頃の話 (東崎町と霞ヶ浦)

久松こう

私が生まれたのは明治四十四年ですから、子ども時代というのは大正時代でしたね。その頃はこのあたりは全部田んぼで、鷺の宮には小さな山があって、その山から東を見ると、霞ヶ浦の向うには沖宿、出島の方までが見えたもんです。今このあたり(東京電力の近く)は家が建てこんでいますけども、当時はここから霞ヶ浦まで全然家なんかありませんでした。だから線路もまる見えで筑波線は真鍋の駅から土浦の駅まで見えなんです。東崎町には堀割りが縦横に出来ていました。霞ヶ浦からいくつも水路があったんですが、川口からずーっと東京電力の前を通って、鷺の宮ぐるりが堀割りになっていて、これが田町へ続いている、六号国道の前の浄真寺の横を抜けて、新川まで続いていたんです。東崎町は漁師町でしょう、だからその水路は漁師の船の通り道だったんですね。そして、その頃は自分の家の裏に船着き場があってそこを「出しっ端」と呼んでいました。源左エ門の出しっ端、加左エ門の出しっ端、七左エ門の出しっ端という

風にどこの家にもありました。その頃は戸数はとても少なく、覚えているだけでも、七左エ門、源左エ門、長右エ門、加左エ門、弥右エ門、がんべいや、その他関さん、飯田さんなどでした。こんな家には家の後ろに全部出しっ端があったんです。その頃は船が交通手段でしたから、船が今の自家用車で、出しっ端は駐車場のようなものだったんですね。私の本家は久松源左エ門という家ですがね。半農半漁で、その頃は養蚕もやっていたんですよ。こどもの頃には、よく船にも乗りました。覚えてるのは、よく「ささびたし漁」というのをやっていたんです。それは粗朶だの篠を束ねて、ひもでつないで、これをいくつもいくつも船につんでいくんです。そしてここだって思う所へ、次々と沈めるんですよ。そして四、五日あとに行つて引き上げるんですが、引き上げる時には片一方の足を船端にかけて、一人が沈んでいる粗朶の束を、ツート、静かにあげていく。そうすると他の一人がたたみ一畳もある三角形の「さで」っていう網でその下をすくうんですよ。そして、引き上げた束を、あっちゃから、こっちゃから、棒でつつくんです。そうすると、中に入っていたえびの大きいのが、ぼたんぼたんと落ちこちるんですよ。うなぎなんかも入ってますよ。棒で笹の束をつつくと、太いうなぎが、のそーっと出てくるん